

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 12 日

所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	川口ゆり

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
北海道 羅臼
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
シャチ実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 6 月 29 日 ~ 平成 26 年 7 月 4 日 (6 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
野生動物研究センター 山本 友紀子研究員
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
上記の期間、シャチ実習に参加させていただいた。ここに報告する。
日程 2016 年 6 月 29 日：移動(犬山-名古屋-千歳 - 中標津 - 羅臼) 6 月 30 日 - 7 月 3 日：シャチ観察(5 時集合 - 16 時半頃解散) 7 月 4 日：移動(羅臼 - 中標津 - 羽田 - 名古屋 - 犬山)
本実習は船上から海洋哺乳類の行動観察を行う際の手法について学び、またシャチをはじめとした知床の海洋生物を実際に観察することが目的であった。調査に同行させていただいた期間は 4 日間であったが、そのうち 3 日間はたくさんのシャチを見ることができた。カマイルカも観察することができた。調査は観光船「はまなす」に乗って行った。調査地では主に背ビレによる個体識別が長年行われている。背ビレはオスはまっすぐなのに対し、メスは曲がっており比較的小さい。知床・根室海峡海域に出現したシャチの写真識別カタログ(佐藤, 2009)には、計 141 頭が掲載されている。また、我々が現地に入る直前には研究チーム「北海道シャチ研究大学連合」が衛星発信機を 3 個体のシャチの背びれに着けることに成功している。発信機は船上から空気銃でとりつけたそうである。実習中も、発信機がついた個体の位置情報を手掛かりにシャチを探した。発信機の示す位置情報と実際の位置がかなりずれてしまっていることもあるようだったが、それでもこれは大変大きな前進に違いない。
シャチはポッドと呼ばれる群れで行動するが、実習期間中、船の周りを数十頭のシャチで囲まれるようなこともあった。そのようななかでも、いくつかの小グループに分かれているように感じたが船の進行とともにシャチが潜水して息継ぎをして、という泳ぎを繰り返すうちに、小グループと思われたものは認識できなくなってしまうことも多く、どこまでの規模の集団をひとつのポッドとするのかよくわからなかった。
今回、観察できた行動は「尾ひれで水面を打ちつける」、「背面からジャンプする」、「直立姿勢で水面から上半身を持ち上げる(スパイホップ)」、「回転する」、「仰向けで泳ぐ」などであった。スパイホップは周囲を偵察する行動と言われる。また、背ビレに海藻が引っ掛かっていたことがあったが、シャチは海藻をわざとヒレにひっかけて遊ぶことがあるらしい。観察できたのは 3 日間であった割にはたくさんの行動が観察できたが、裏を返すと、船上から容易に観察できる行動はこのくらいしかない、ということでもある。息継ぎやジャンプなどで海面に現れる以外は水中での行動となるため、観察困難であることが多い。今回も、オスがメスに対してペニスを見せて交尾に誘っていたと後から聞いたが、観察中は気が付かなかった。グルーミングなどの社会交渉や採食などの行動の観察が容易な霊長類に比べて鯨類の行動観察の難しさを実感した。一方で、行動観察だけでなく、音声も貴重なデータである。研究チームは水中にマイクをいれ、シャチの音声を録音していた。ヘッドフォンで聞かせてもらったが、様々な声で鳴いているのが明瞭に聞こえることもあった。直接観察に限界がある分、音声などを用いて多角的に研究することが必要なのであろう。
観察中、シャチはかなり船の近くまで寄ってきてあきらかに興味を示していることがあった。また、逆に見えたと思うとかなり長い間潜水を続け、海面にあがってこなかったり、上がってきても遠くへ行ってしまうこともあった。船がシャチの行動に悪い影響を与えることはないのだろうか、と思ったが、このことから、シャチは観光船に興味があれば近づき、避けたければ離れているようだったのであまり問題はないのであろう。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

今回の実習は野生のシャチを驚くほど間近で観察することができ、非常に満足であった。最終日は1頭も観察できなかったものの、そのことでシャチを観察できるありがたみを実感した。印象深かったのは、研究チームのみなさんにいろいろとシャチについての質問をさせていただいたが、「まだわかっていない」という答えが大半であったことである。基本的なことすら謎に包まれたシャチの研究は何がわかっていても新たな発見となるので魅力的であると感じた。



尾ひれで水面を打つ



背面から飛び込む



スパイホップ



スパイホップ



2 個体同時に



海藻をヒレにひっかけて遊ぶ

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



回転するシャチ



仰向けで泳ぐ



条件が整ったときのみ、海中での様子もよく観察できる



水中にマイクをいれて音声を録音する



個体識別は主に背びれで行う

この個体は傷が特徴的

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



他個体と遊ぶような行動も観察された



知床山脈を背景に泳ぐシャチ



ポッド内の個体間距離はかなり小さいこともしばしば



カマイルカ



ベタ凧の中観察されたジャンプ



夕日を受けて虹色に光るレインボーブロー

・ 6. その他（特記事項など）

山本由紀子氏をはじめ、「はまなす」の皆さま、研究チームの皆さまに感謝いたします。ありがとうございました。また本実習への参加は PWS の支援を受けて行いました。ここにお礼申し上げます。